

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：25101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590190

研究課題名(和文)臨床心理士による外国人児童生徒への心理臨床的援助プログラム - いじめ予防と対応 -

研究課題名(英文)An Educational Program to Psychologically Support Children from Multi-cultural Backgrounds for Clinical Psychologists: Bullying Prevention and Support

研究代表者

藤田 恵津子 (FUJITA, ETSUKO)

公立鳥取環境大学・環境学部・准教授

研究者番号：00634255

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)： 両親のいずれかが外国籍の子どもは50人に1人の割合で生まれており、学校では日本語や進路、対人関係、アイデンティティなどの問題を抱えているケースが少なくない。本研究では、多文化を背景とする子どもたちへの心理臨床的援助を行っている臨床心理士を対象とした教育プログラムの作成を目的とした。1年目は多文化間カウンセリングを行っている臨床心理士、2年目は日本語教員やボランティア、最終年度は在外日系学校園へのインタビューを実施し、多文化を背景とする子どもの課題や支援について調査した。学会や臨床心理士会などでの発表をもとにリーフレットを作成し、関係機関に配布、現在、改訂版作成に向け準備中である。

研究成果の概要(英文)： One baby in 50 has a parent from a different country, and such children often have difficulty with Japanese, careers, personal relations, and identities. The purpose of this research was to make an educational program to psychologically support children from multi-cultural backgrounds for clinical psychologists.

In the 1st year, I interviewed clinical psychologists to research the issues and support those who do multicultural counseling, then in the 2nd year, Japanese language teachers and volunteers, and in the the 3rd year, the Japanese school and kindergartens overseas. I made and distributed leaflets based on a presentation at Intercultural Education Society of Japan and Society of Certified Clinical Psychology, and am preparing for the revised edition.

研究分野：臨床心理学

キーワード：多文化 心理臨床的援助 アイデンティティ 母語・母文化 日本語教師 ボランティア

1. 研究開始当初の背景

(1) 外国人登録者の激増

平成 2 (1990) 年の出入国管理法改正は、我が国における労働力不足対策として、日系 3 世までの日本での就労を可能とした。その結果、製造業を中心に就労目的のニューカマーが激増し、平成 22 (2010) 年末での外国人登録者数は 20 年前の 2 倍、約 213 万 4 千人となり、日本国在住者の約 1.7% となっている (法務省「外国人登録者統計」)。また、国籍別にみると、中国が約 3 割とトップを占め、以下、韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピン、ペルー、米国と続いている。そして、在留資格としては、一定の要件を満たして無期限に在留できる「一般永住者」が 4 分の 1 を占め、以下、在日韓国朝鮮の方々のような「特別永住者」、「留学」、「日本人の配偶者等」、特別の理由のために一定期間在留できる「定住者」と続いている。

(2) 外国人児童生徒の現状と課題

外国人就労者の増加に伴い、帯同する配偶者や子どもも増加している。我が国は「子どもの権利条約」に批准しており、国籍を問わず、すべての子どもに対して無償の初等教育を保障している。在日外国人学校やインターナショナルスクール、通信教育を選択する保護者がいるものの、経済的かつ社会的事情から多くの保護者は日本の学校を選択している。

日本の学校における外国人児童生徒数は平成 22 年度時点で小学校に約 4 万 3 千人、中学校に約 2 万 3 千人、高等学校に約 1 万 2 千人など、総計で約 8 万人となっている (文部科学省「日本の学校に在籍する外国人児童生徒数の推移」)。しかしながら、そのすべてに日本語指導が必要であるわけではなく、外国籍であっても日本で生まれ育ち日本語や日本文化に精通している子どもや、両親のいずれかが日本人であっても、国際結婚や離婚、転勤など保護者の事情で外国生活が長く日本語ができない子どももいる。

外国人児童生徒が直面する主な課題には、日本語習得および学力向上、進路選択や生活習慣、母語・母文化維持、アイデンティティの形成、友人関係などをはじめとする対人関係の難しさなどがあげられる。

日本語指導が必要な外国人児童生徒は約 2 万 8 千人で、前年度から 3,164 人 (対前年度比で 12.5%) 増加であり、約 95% が小中学校生である。彼らが在籍する学校の 6,212 校中、「1 人」の在籍校が約半数近くを占めており、「5 人未満」の在籍校が全体の 8 割弱を占めている。子どもたちの日本語能力に応じて、日本語指導担当教員 (以下、日本語教員) が別室で個別に教える「取り出し」授業や、在籍学級の授業に入り込んで教える「入り込み」授業、放課後の補習などがボランティア等の外部人材も活用し進められてはいるものの、日本語の初期指導と並行しての学習言

語指導には極めて厳しい環境と言える。それ以外にも、日本の学校がもつ独特な文化や暗黙のルールを察知した上で達成感を味わったり、楽しいと感じる友人関係を形成したりすることができず、不登校に陥っていくケースも珍しくない。

さらに、家庭では仕事で多忙を極める保護者とのコミュニケーションが希薄になる上、母語・母文化維持も困難となり、学校でも家庭でも孤立感や不全感を高めていく。学習や生活面に向けての取り組みは盛んに行われるようになってきたが、このような子どもたちが自尊感情を高められるような心理的側面からのアプローチに関してはまだまだ取り組みの途上と言える。

(3) 臨床心理士の外国人児童生徒への対応と課題

日本は外国人児童生徒が自尊感情を高められるような多文化間のカウンセリングに関してはまだまだ取り組みの途上である (重松, 2004)。臨床心理士の職能団体による研修も暗黙の裡に日本人児童生徒を対象とした内容となっており、「異文化受容」、「国際理解」などの研修領域は存在すらしない。臨床心理士が異文化理解を深めることは、外国人児童生徒に対する心理臨床的援助を促進することであり、極めて重要な急務である。

1988 年に臨床心理士という心の専門家としての資格ができ、現在、約 25,000 人の臨床心理士が教育や医療、福祉、司法・矯正、産業など多様な領域で働いている。さらに、災害や事件・事故など緊急支援の場でも活躍するようになっている。しかしながら、臨床心理士のための教育や臨床実習、研修の内容は不登校・虐待・いじめ・発達障害など領域が固定化しており、最近では、臨床心理士の「養成方法のあり方」や「地域の特徴に即して貢献できている職能集団か」という点も議論に上っている (皆藤, 2012)。本研究が、臨床心理士の教育内容の偏重に一石を投じ、臨床心理士という心理の職能団体がより専門性や活動の地域性を高め、一層社会貢献することにつながっていくものと考えられる。

2. 研究の目的

以上のことから、本研究は、学校現場 (一部、発達相談機関含む) においてより日常的に子どもたちとかわっている日本語教員やボランティアの方々などの支援者は、(1) 外国人児童生徒の心理臨床的援助に関してどのように考えているか、(2) 心理臨床的援助を促進するために、どのような知識やスキル、資源を必要としているか、(3) 以上のことから、多文化間カウンセリングに携わる臨床心理士が理解しておく必要がある教育プログラムとはどのようなものかについて明らかにすることを試みるものである。

尚、先行研究「臨床心理士の異文化受容」に関するインタビュー調査 (平成 24 年度研

究活動スタート支援)で明らかになった以下の分析についてもさらに検討することを試みる。【表向きの異質性】が【見立てを困難にする】場合があるが、次第に<発達課題>や<アイデンティティ><親子間コミュニケーション>という【心理社会的課題】が表面化する。さらに、彼らの<生活の流動性>や<養育観・教育観の違い>等から、日本人保護者以上に【つながりにくさ】を感じる。【保護者に対する包括的理解】を深めるためには、【精神的対等性】を尊重する社会的資源との連携が必須である。異文化臨床は、すべての子どもに通じる【臨床の普遍性】を感じさせるものである。しかしながら、<今、この子に対してできる援助>を、言葉や文化的背景、教育観・養育観に対して<開かれた目>と<鋭敏な感受性>を持って取り組むべきである。

3. 研究の方法

(1) インタビュー調査

2013年6月から2015年10月にかけて、1年目は多文化間カウンセリングを行っている臨床心理士、2年目は日本語教員やボランティアなど教育関係者、最終年度は在外日系学校園の教職員や保護者へのインタビューを実施し、多文化を背景とする子どもの課題や支援について調査した。インタビューは、約1時間の半構造化面接形式とし、対象者には事前にメールや電話で本研究の主旨や目的、質問内容等を説明し同意を得た。さらに、記録やその使用についても書面です承を得た。

<主な質問内容>

- ・多文化を背景にする子どもたちとかわるききっかけ(外国人の方の集住地域や問題行動への対応としての出会い以外に考えられるものは何か)
- ・元々の多文化に対する関心(多文化に対する開放性は影響しているのか)
- ・活動の概要、やりがい、課題(各自自治体の取り組みや事業を幅広く知ること、支援者の動機づけを分析すること)
- ・子どもや保護者、支援者が抱える課題、不応症(支援者もまたマイノリティであることが多い)
- ・心理臨床的援助の可能性(心理社会的成長を支えることでつながっていけるものとは、どのようなものが考えられるか)
- ・活動を通して感じる自身の変化、他(多文化臨床を通して確認する差異や共通性があるのではないか)

<主な対象者の臨床領域>

- ・発達(女性3人、男性1人)
- ・教育(女性8人、男性3人)
- ・医療(女性3人、男性2人)
- ・司法矯正(女性2人)

以上、主に、多文化を背景にする子どもたちが多い関西、東海、関東地方にて実施した。・在外日系学校園(日系私立学校の教員1人、日本語補習校教職員3人および保護者4人、

私立幼稚園教員1人)

米国西海岸にて実施した。

(2) 多文化や心理臨床に関する学会等での発表

1に関する調査結果を異文化間教育学会(2014年6月7日、同志社女子大学)および大阪府臨床心理士会合同ワークショップ(2014年11月16日、大阪経済大学)において発表し、多文化を背景にする子どもへのより良い支援や対応について参加者との意見交換を図った。

尚、臨床心理士が参加する合同ワークショップは、以下の内容で実施された。1の筆者からの発表は同様であるが、本研究のインタビュー調査協力者による話題提供は午前2人(国際学校、帰国生徒学級)午後2人(多文化共生センター、保健所)で実施された。

(3) リーフレット作成

科研「スタート支援」および本研究のインタビュー調査、学会や大阪府臨床心理士会合同ワークショップに関する報告、交流会を通して得られた研究成果を基に、臨床心理士を対象とした「多文化が背景にある子どもの心理臨床的援助のために」のリーフレット(次ページ以降参照)を作成した。作成にあたり、本研究のインタビュー調査および分析調査に携わった臨床心理士3人(臨床歴10年以上)、多文化領域に携わっている臨床心理士2人の協力を得た。

4. 研究成果

(1) インタビュー調査

小学校の英語教育が促進される一方で、「英語圏」と「非英語圏」の人々への支援に関する意識の格差が広がっている。また、多文化を背景にする子どもたちの中では心理社会的課題を抱える事例が多く見られるが、不応症が表れる前の発達早期に健診や福祉の領域からのアプローチであれば比較的つながりやすいのかもしれない。直接的なカウンセリング以外に、限られた勤務だからこそコンサルテーションやシステム作りが効果的とも言えるのではないだろうか。さらに、どの支援にもつながっていない「未知の被支援者」や、支援対象の想定外になりがちな、いわゆる「エリート留学生」なども見過ごせないテーマである。

多文化を背景にする子どもたちに必要に応じて、そのような「環境調整」や「福祉的介入」がなされ、「いつでも安心して話せる」場所や先生に日常的に囲まれることで、「想像を超えるような成長」を見せる。「悩みを語るとき、心を語るとき、同じような状況の中で生活をしていて多くを語らずともわかってくれる相手に、自分が一番使いやすい言葉で語り、理解してもらえると、心がふわっと軽くなるものです。言葉の壁、文化の壁は、心が疲れているときにこそ大きく立ちほだ

かってきます」(今田、2014)。

臨床心理士の「多文化」に対する資質を考えると、教員との垣根を越えてくれるような「解放性」やコンサルテーションなどの「支援者支援」(多文化の間接的支援)が「教員のモチベーションや達成感」を高め、その結果として、子ども・保護者・学校・地域へと広がりを見せる「コミュニケーションの連鎖」へと発展していくのである。そして、それが、いじめの芽を摘み、共生、インクルージョンへとつながっていくと考える。

さらに、先行研究「臨床心理士の多文化受容」に関するインタビュー調査では、臨床心理士は自身の多文化に対する資質や能力の課題や向上について取り上げる傾向にあった。また、今回のインタビュー協力者(多くが学校現場に携わる)は、学校や地域における臨床心理士との連携や、コンサルテーションやシステム作りなどの間接的支援の必要性を語る傾向が見られた。臨床心理士から心理学やカウンセリング、ストレス・マネジメントなどに関する基礎的知識を得ることで子どもたちへのより良いかわりめざしていることがわかった。

(2)多文化や心理臨床に関する学会での発表

50人に1人の新生児が多文化を背景に出生している現状を考慮すると、多文化臨床に関する理解を促進していくことは喫緊の課題である。これは心理士個人の資質や経験の課題であるだけではなく、多くの心理士の勤務形態が週1回勤務の非常勤であるという構造的要因も少なからず影響していると考えられる。限られた時間数の勤務であれば、より緊急性が高く、マスのかかわりでより効果的に活用できる方向へとシフトしがちであることは否めない。しかしながら、多文化を背景にする子どもへの啓発や予防教育の段階で手厚く対応することは、個人の事例の改善や解決だけではなく、「日本」という社会に対する肯定的認知や愛着を育みながら成長していくことにつながると考える。

以下は、臨床心理士会合同ワークショップ参加者の感想アンケートの一部抜粋であるが、臨床心理士が多文化について知識や経験を得る機会が想像以上に少ないことがうかがえる。

- ・多文化の方とのコミュニケーションを支えるには心理的援助も必要であり、臨床心理士の新たな役割であることがわかった。
- ・日本人の子ども同様に、多文化の子どもたちを大事に見守っていきたくと思った。
- ・これまでになかった内容だったので、実際の現場の先生にお話をうかがえてよかった。自分がいかに知らないか思い知らされる。外国の方が多い校区勤務だが、まだ担当したことはなく、このような厳しい現状を今後どのように支援とつなげていったらいいか考えていきたい。
- ・自分の中に「多文化」を意識しながら、今

後の臨床活動に生かしていこうと思った。

・ようやく取り組んでくださった将来を見据えてのテーマ、実践豊富な内容でとても勉強になった。これからの日本に本当に必要なテーマ。

・臨床の基本はクライアントがどういう方であっても変わらない、その普遍性に改めて気づかされた。互いの工夫を持ちより、そういう基本は変わらない。しかし、どうしてこのような大事なテーマが研修では全く取り上げられないのか不思議。

・福祉領域で多文化の子どもたちの療育や不適応のカウンセリングにかかわってきたが、日本語もさらにできない保護者への支援はほとんどないのでは？

・通訳はできなくても、「わかりやすい日本語」で説明する、心理検査実施の工夫などは発達障害の子どもへの支援やスキルに通じるものがある。自分にもまだまだできることがあると気づかされ、とても力をもらった。

(3)リーフレット作成

以上の調査研究および発表、意見交換、検討の中で、「外国人児童生徒について初めて勉強する臨床心理士」が対象であることを重要視した上で、「社会情勢」「多文化」「事例検討」「臨床における普遍性」など念頭に置いた結果、リーフレットの内容は下記の通りとなった。

外国人児童生徒の現状と課題

- ・さまざまな定住外国人の方々
- ・外国人児童生徒の現状と課題
多様な国の教育と文化
事例紹介(架空)
- ・乳幼児の母親

来日間もない日本人児童

- ダブルリミットの中学生
アイデンティティを模索する高校生

- (4)支援や連携のキーワード
- (5)臨床心理士としてできること
- (6)文献

(4)活用について

作成したリーフレットは、臨床心理士会以外に、本調査研究の協力者の皆様、多文化に関する団体、教育委員会などに配布し、啓発に努めている。皆様から忌憚のないご意見をうかがい、より良い内容に改訂し、多文化臨床の一層の理解促進につなげていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

藤田恵津子 臨床心理士による外国人児童生徒への心理臨床的援助プログラム - いじめ予防と対応 - 異文化間教育学会第35回大会 2014年6月、同志社女子大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

藤田恵津子 (FUJITA Etsuko)

公立鳥取環境大学・環境学部・准教授

研究者番号：00634255